

【翻訳】

カトリン・シュミット『きみは死なない』

第一章 「瞬く間に、あるいは」

寄川 真弓 訳

要旨…ドイツの作家カトリン・シュミット (Kathrin Schmidt, 1958-) が二〇〇九年に出版した小説『きみは死なない (Du stirbst nicht)』から、第一章「瞬く間に」あるいは (Wimpenschläge oder in the Twinking of an Eye) を訳出した。

この小説は、脳溢血で倒れた四十代半ばの女性を主人公に、彼女の病気が快復していく過程を、さまざまなエピソードを交えながら描いたものである。シュミット自身がくも膜下出血で倒れており、その体験をもとに書かれたため、とくに病院内の描写はリアルで生々しいところもある。

訳出した第一章は、集中治療室に眠る主人公の朦朧とした意識から始まる。現実と幻覚が交錯する彼女の意識や、記憶喪失、失語症、半身不随などの病状が、ときにユーモアを交えながら描かれている。集中治療室にいたのは三週間だが、主人公にとってはごく短い間のことに感じられ、それが「瞬く間に」という副題となる。

なお、『きみは死なない』は二〇〇九年にドイツ書籍賞を受賞している。ノーベル文学賞に輝いたヘルタ・ミューラーの作品を抑えて選ばれたため、当時話題となった。

キーワード…現代文学 翻訳 闘病記 発展小説 ドイツ書籍賞

\* よりかわ まゆみ

文教大学文学部外国語学科・非常勤講師

彼女の周りでカチャカチャ音がする。

妹が結婚したときに、母はブリキ製のボウルにアルミ箔をしいて、その上に銀のカトラリーをのせた。それから熱い塩水を注いだ。しばらくして、きれいになったカトラリーをボウルから取り出し、乾かした。同じようにカチャカチャ音がしたのだった。いったい誰が結婚するのか？ 彼女は目を開けようとする。失敗。目を開けようとしているだけなのに。それだけで十分だ。それにしてもはつきりと母の声が聞こえる。ああ、やっぱりカトラリーだ！ 母は何て言っているのか？ 「右の手は本当に左よりずっと冷たいわ、右の足も同じよ」と母は言う。

どうして母は冷たい右手なのだろうか、と彼女は不思議に思う。自分で両足の体温を計るのを想像すると、彼女は口元がほころんでしまう。

「笑っているわ」と母が言う。

「ただ顔を歪めているだけだ」

父が言ったのか？ もちろん、疑いもなく彼女の父親の声だった。今こそ彼女は目を開けたいのだ。両親のこの台所で、彼女は何を探さなければならぬの

か？ そこではカトラリーがカチャカチャ音を立て、手や足の体温が調べられ、彼女は目を開けることができない。



「まあ、どこから来たの？ ロンドンから？ (O, where do you come from? From London?)」

彼女は自分の娘に話しかけた。彼女が言ったのか？ 片目を開けることができる。彼女はやってみる。その女の子は十四歳で、今日語学研修旅行でイギリスへ行った。どうして娘はもうここに帰っているのだろう？ 彼女はうめく。何らかの理由があつて、彼女はうめく。娘を励ますつもりで、そのつもりで英語を話そうとしたのだった。嬉しそうにしていることは何の役にも立たないようだ。女の子は悲痛な面持ちだ。何が悲しいのか？ 誰に尋ねたらいいのだろうか？ 視線が泳ぐ。そこだ！ 娘の横に夫が立っている。「私の夫 (My husband)」と彼女は言う。それを笑ってくれたらいいのに……。

何も言ってくれない。

少なくともその男は微笑んでいる。彼をじっと見れば見るほど、その微笑が珍しいものに見えてくる。頬骨の間で、まるで塩漬けキュウリのように、その微笑は杭で固定されてぶら下がっている。

「塩漬けキュウリ (Salt cucumber)」と彼女は言う。  
そんな英語がそもそもあるのだろうか？



「……一九七二年十二月三日生まれ、ヒュッケルホーフェンに住んでいて……」

待て！ それは彼女じゃない！ どうして言いたいように、大きな声を出してそう言えないのか？ こんちくしょう、できるはずなのに！

「さあちよつと落ち着いてください、わたしたちはすぐにあなたのところへ行きますから」

誰が言ったのか？ そこにいる若い男？ できる、両目を一度に開けられる、と彼女は思う。それは少し難しく、何かがまぶたの上に乗っているような気がする。若い男は微笑むが、それで彼女が落ち着くことはない。

それは彼女ではないんだってば！ 十四歳年上で、

ヒュッケルホーフェンには住んでいない。

「わたし……ではない。わたし……ではない (I don't... I don't...)」

どうして文が続かないのか？ そのときその若い男が青い外衣を着た男たちに、ときおり意識が戻って以来、ほとんど彼女は英語でしゃべろうとしているようだ、と言う。男たちは笑う。彼女は女のひとを探す。男たちの後ろに一人の女が立っているが、何かで忙しそうである。

男たちの一人が彼女の上に身をかがめる。

「私の言うことが聞こえますか？」

聞こえるかどうか、彼女は応えやしないだろう。

かまわず大声でわめき続ければいいよ。

目を閉じる。



その声を彼女は知っている。それはインガだ。インガは誰かを連れてきたようだ。「遠慮なくお入りください！」と低い声がでて、物が落ちるようなガラガラ声が続く、そのあとに薄笑いが浮かぶ。なぜ彼女は目

を開けることさえできないのか！　そこで何が起きているか、つじつまを合わせなければ。友人のインガは彼女を見舞うつもりだった、頑張つて中に入ろうとしたのだが、ドアの向こうには深い落とし穴があるにちがいない。インガたちは中に落ちていった。彼女は動揺してくる。本当に横たわっているのか？　なぜ？　腕、足、頭を持ち上げようとするができない。それが自分をもっと不安にさせているのだと気づく。友人に何が起こつたのか、友人の声を彼女は正確に聞き取つたのだろうか？　ああ、やっぱりまだ、彼女はもちらん落ち着かなくなる。穴から這い出るのは確かに簡単なことではないよね？　「遠慮なくお入りください」と低い声がでる。

しばらくしてから、やっぱり彼女は驚いてしまう。インガはいつたどこにいるのだろうか？　インガはまた穴に落ちてしまったわけではないよね？



彼女は進む。まるで小さなヘーヴェルマン（注二）のように彼女は現れる。小さなヘーヴェルフラウ。それ

はすてきた。いつもそんな風に進んで行けたら。明かりだけがまぶしく照らしている。近くから照らす月がこんなに明るいのを、本当は知っているべきだったのに。でもそんなこと、これまで一度も考えなかった。

彼女は進む。

彼女は進む！

また片目だけ開けられる。何て運がいい、女の人よ！　その人は微笑んでいて、彼女と並んで進んでいくようだ。その上半身は彼女とは対照的にまっすぐ立っている。彼女はその人に、あなたも横になつてごらんなさい、こんな風に走るのはすてきよ、と言いたい。彼女は口の中に何かを入れている。口を閉じることが全くてできない。口の中に何が挟まっているのか、その女性に聞きたいが、その人は彼女の腕を取り、管にはめる。ネットワークで他人に制御されるのか？　どうしよう、不安だ。彼女は抵抗したいのだが、目は閉じる。



頭蓋骨がはずされる。慎重にロボットが赤い血の色をした肉片を取り除く。そこは埋め合わせなければな

らない。そこでロボットがとてもきれいな、ライトブルーの石片を挿入しようとする。その石はいったい何という名前だったか？ 彼女には思い浮かばないだろう。彼女の娘がそんな石片を持っていたが、色がつけられているから、それは偽造品だと言っていた。なるほど、それならここにあるのはちよつと違うのかもしれない。ロボットは彼女の頭に偽造品を詰め込もうとはしないだろう！ その石片が中に入ると、また暗くなる、それまでは不快なほど明るかったのに。つかの間の薄暗さ。そのとき彼女は、薄くて、長くて、可動式のプラスチックの管が、まだ自分の上にあるのを見る。その管はどこまでのびて、どこからくるのか？ 頭を動かせないのは残念だ、彼女はその管を目で追うことすらできない。黒ずんで、赤茶色の液体がその中を流れていく、グルグル音をたててしたたり落ちる。



少しまえから、大声を出して、若い女が彼女の周りで忙しく作業している。その女は途切れることなく話している。誰とそんなにたくさん話しているのか？

ここにはまだほかに誰がいるのか？ でも彼女は頭を動かせやしない、そのとおりだ……。さあもう本当に目を開けなければ、だって何かが変わっているのだから。彼女は起こされ、持ち上げられ、座らされる。気分が悪くなる。そのとき彼女は何かとても変なものを食べさせられたにちがいない。

その女のまぐし立てる言葉がだんだん近づいてくる。

「……聞こえますか、ヘレーネ？ そうね、何か話すのは難しいわよね？ いずれにせよ、あなたをときどき立たせる練習をもうすぐ始めなくちゃならないのよ。これは今日最初の練習だったの、聞いていますか？ 聞いていますか？ 聞いていると思うけど……」

それは彼女に向かって話されていたのか？ わからない。眠たい。へとへとだ。

彼女は自分がヘレーネという名前なのを奇妙に思う。



そこにいる男は手に何を握っているのか？ 彼女のペースメーカーのように見える。実際に、彼はペースメーカーを彼女の鼻先に突きつけて、それをようやく

見つけて取り出したのだと言う。いったいどうしてあいつらはペースメーカーを取り除くのだろうか？ 彼女がその問いを発することはない。その男はおもしろがり、ほくそ笑む。彼はそれを手に持っている、彼女の鼓動を。彼女は抵抗しないといけない、せめて眠り込まないようにと。絶対に夜は暖房がつけられる、そう、昨夜は、もうあまりにも熱くて、火事なのかと思った。だから彼らはペースメーカーを取り出したのに決まっている、なぜなら彼女はただ一人まだ生きていて、彼らはそれを驚いていたのだから！

ペースメーカーをつけている人というのは、身体はもう死んでいたとしても、その心臓はドクドクと鼓動する。とても愛想よく、ここにいる人たちはみな、おまえに微笑みかける、ここにいるのは殺人者の集まりで、ほかの全ての人と同じように、彼らはおまえを殺すつもりでいる、そのことはなんとしても夫に言わなくては。夜になるまえには来てくれるといいけど。いたい全体彼女はどこにいるのか？ 本当にずいぶん長い間、もう両目を開けたままでいるが、自分がどこにいるのかなんて、彼女は分かるうともしない。



また彼女の両親がそこにいる！ 起き上がりたい、誰が結婚したのか聞きたい。どうしてあなたの右の手は冷たいの、お母さん。だめだ。起き上がれないし尋ねることもできない。

集中してみる。

口は結んでいる。目は開いている。

本当だ、両親だ。父親は、彼女の妹がスケートボードでガイセンベルクを滑り降りていったその当時と同じようにみえる。あれからどのくらい経つのだろうか。計算する。今は二〇〇二年なのか？ 妹は一九六一年生まれで、スケボーツアーのときは六歳くらいだった。だから一九六七年。三十五年経っている。そんなに長く！ 父がどんな風に見えたか、どうして彼女は覚えているのか？ お父さん、悲しまないで、と彼女はその当時ささやき、父は彼女を抱いて、医者が彼らのところに、家に帰すよう妹を連れて戻ってきたとき、喜びのあまり涙を流した。いいえ、彼らは妹を病院に入院させたくなかったのだ。

病院のなかに？ 彼女が滞在しているこの建物も  
ひょっとして……。

母親の声に遮られる。母は隣にいる女性に、娘がいつまた食べられるようになるのか聞いている。典型的、母はいつも食事のことを気にしている。彼女はぜんぜんお腹が空いていないのに。

「まだかかります。さしあたり、ゾンデで栄養は与えられます、おわかりですね」とその女性は言う。

ゾンデでね、わかるわよ。満足して彼女は目を閉じる。



左に若い男が、右にも若い男がいて、彼女をじっと見ていている。彼らのことは知っているような気がするが、彼女はその顔をまともに見ようとしない。

まあね、本当は彼らが誰なのか知りたいのだけれど。彼らは、彼女の頭をはさんで、静かに談笑している。彼女は考える。左に立っている若者にお願したい、……をもう少し奥に引っ張つてと、そうすればそれをもっと腰にぴったりとあたるのだけど、そのいまいま

しい単語が見つからない、それはいったい何というだろう？ 彼女は若者たちに、その二人に、合図を送る、自分がして欲しいことを、つまり……を少し奥に引っ張つてほしいのだと。彼らにはそれが分からないようだ。

そもそも何を使って二人に合図を送ったのか？ 手を使って？ 左の手はしっかり管で止められている。彼女はネットワークなんかにまだ繋がっていて、いまだに遠隔操作をされているのか？ 右手で不安を伝えたいのだが、右手はただそこにあるだけで、動かせない。奇妙だ。どうして彼女は手を動かせないのか？ きっとネットワークを使ってあいつらが動きを全部コントロールしているのだ。

それで若者たちは？ そのネットワークに関係しているのか？ 彼女は若者たちをもっと厳密に眺める。安堵。知っているよ。それは息子たちだ。名前は思い出せないが、それは今問題ではない。彼女は信じて、笑う。息子たち！ どうしてもっと早く二人をよく見なかったのか？ そうしたらもっと長く喜んでいられたのに！ 彼らのうちの一人は大学生だ。いったいど

ここで勉強しているのか？　ワイマールだ。オーボエ。そうだ、オーボエだ。オーボエの息子は彼女の鼻のまえにCDをかざしている。自分で録音したもので、何かその上に書いてあるが、彼女はそれを認識できない。彼はそのCDを小さなブレイヤーに挿入し、彼女の耳にヘッドホンをつける。あー、いいわね、なんて美しい音楽なの。オーボエ。きつとこの上なく安らかに見えるはずだ、と彼女は思っているにちがいない。

つまり、自分がどう見えるのか、彼女は考えているところだ。どう見えるのだろうか？　それはもうわからない、自分の写真は持っていないのだ。あいつらが写真を盗んだのだ！　それは地獄の前段階で、本当の苦しみのまえに来る。そして本当の苦しみは、夜、暗くなるとやってくる。どうにかして、息子たちはそれを知るべきで、二人は彼女をここに残しておいてはならないし、さっさと行つてはならないのだ！　あんなたち聞いてる？　ねえ、あんなたちはどこにいるの？　彼女は疲れて目を上げる。男の子たちは行つてしまふ。何も危険を察することなく。

◆◆◆  
金髪の女が入ってきて、ヘレーネの周りにあるものをあれこれ操作する。彼女は頭だけでも少し動かそうとしてみる。金髪は彼女を嫌そうに眺めるが、仕事を片付けて、たくさんの画面が重なり合っているモニターを見る。金髪は泥色のおかゆが入った袋を手にかけている。彼女はそこをおかゆを鉤に引っかけて、それに管を取り付ける。「昼ごはん」と、彼女は言つて笑う。

◆◆◆  
いやだ、彼女はその金髪が好きではない。その金髪は好きじゃない。彼女はあの若い女、ひっきりなしにしゃべるあの若い女が好きだ。髪の毛は黒だ。彼女が来ると、不安は去る。金髪だと不安がやってくる。行つたり来たりだ。金髪と黒髪のあいだにもう一人いる。その男はちょうど彼女の大便を拭き取ったところだ。惨めだった。しものほうで何が起こっているのか、とにかくわからない。何がそこで起こっているのか。あ



あ、またその男がこつちに来る。掛け布団を横に置き、彼女の足を広げる。待て、それはしてはならない！待て！しかし彼は微笑んでいる、ここではないいつでもみな微笑んでいるように。この犯罪者が。彼は彼女を洗っているのか？彼は洗っている。それは実を言うに気持ちのいいもので、彼女は抵抗するのをあきらめたのかもしれない。どっちみち彼は抵抗に気づかないでしょう？だから洗ってもらいましょう。どうしてあいつらは彼女にやらせようとしないのか、彼女はそれをはっきりとは知りたくない。きつと彼らは次の夜のあとにきれいな死体を望んでいるのだ。糞尿で汚れた、こんな血まみれの人形は望んでない。彼女は血を流しているのだ。おむつは血でいっぱいだった。でも痛くはない。血を流すことはそんなに悪いことにはならないだろう。いったい全体何日なのか？わからない。なんとなく、彼女の娘は、最近語学留学で旅立ったようだった。それは七月十日だった。でも娘は同じ日にもうここにいたのだ！彼女はすっかり熟考してみても、どういふことかわからない。七月十五日か十六日だろうか。そうたぶん。だいたいのところは。

これは生理なの？ 答えはでない。最後に生理があったのはいつ？ 彼女の父が三十五年前にどう見えたかは思い出せるが、いつ最後に生理があったかはわからない。

ちょうどその男が彼女に新しいおむつをつけている。

彼女は眠りたい。



夜にまたたくさん人が集まり、上へ下へと動きまわり、ベッドのきしむ音がして、荷台が運ばれた。きつと彼らは死体の運搬がどうにもうまくいかないのだ。あいつらがその人たちに何をしようとしているのか、いまやつと彼女はわかる。電気をその人たちの体に流して、想像を絶する熱さで水分を全て取り除くのだ、そのあとに残るのは乾いてしわの寄った角石だ。そんな四角い石を彼女は以前どこかで見たことがある。それは角石で作られた壁だった。ひよつとしたらこの角石で彼らは家を建てるのかもしれない！彼女はそこに送られるのか。まるで乾燥機の中のように、彼

女は緊張していた。操作していた男が、彼女はもうも  
太りすぎていて、うまくいかないと言いい、機械を止め  
て彼女を戻した。



確かに彼女はとても不安だが、でも悲しくはない。  
そのことに彼女はびっくりする。人は死ぬ間際にほと  
んど全てを知るといいうが、本当にそういうものだ  
……。何かがまだ抵抗しているが、それは徐々に小さ  
くなっていく。昨晩はここから逃げ出せるという希望  
があった。若いお尻拭きの男が彼女の隣に座ってい  
た。彼女が死にたくないのを彼はなんとなく理解して  
いた。夜になったら隠してあげましょう、物置部屋に、  
そして朝になって仕事が終わったら、そこから出して  
あげましょう、と彼は彼女にほのめかした。彼女は喜  
んだ。

もちろん、そんなことは起こらなかった。彼は朝やつ  
てきて、それでさようならだった。ただ、わずかなま  
ばたきで、うまくいかなかったことを彼女にほのめか  
した。

それがどうした。彼女をここから運び出すようなり  
スクを冒して、彼は仕事と生活を失うことはできない。



あの金髪の女がやってくると、彼女は落ち着かなく  
なる。金髪は、いつもモニターのまわりをいじくり回  
していて、遠隔操作するあいづらの一味に決まってい  
る。金髪が袋を彼女の頭の上の鉤に掛けるときは、彼  
女は眠っている。眠りたくないのだが、眠っている。  
さまざまな袋を金髪はつぎつぎと彼女の上に掛けてい  
く。



彼女が元気なときは、ときおり男性陣が立ち寄る。  
相変わらず、少なくとも一人は、彼女に聞こえるかど  
うか尋ねる。相変わらず、彼女は応えるのに意固地に  
なってしまう。とにもかくにも彼女は一九七二年生ま  
れではないし、ヒュッケルホーフエンに住んでいない。  
その人たちがもし取り違えをしていなかったら、ここ  
から抜け出すチャンスがひとつとしてあったかもしれ

ない。口を開いて頑張ってみてもそれは無駄なことだ。どっちみち彼らは信じないだろうから。



アフアージー。

もちろん彼女はこの言葉を知っている。でもそれはどんな意味だというのか？ どうしてそれが思い出せないのか？ どういうわけか彼女はそれを知っている。青色の外衣を着た男性がその言葉を発したとき、彼女はすぐにわかった。アンファンクジーベン（「アンファンクはドイツ語で「はじめ」、ジーベンは「七」を意味する）、そう声に出したかった。そうだ、アフアージーはアンファンクジーベンの短縮形かもしれない！ 七時頃からここでは夜が始まる。液体の詰まった袋で意識を奪い取られると、きつと人々はまたぎゅうぎゅうに押し込められて、螺旋状に並べられるだろう。誰が死ぬか、彼らは外側からガラスを通して眺めている。彼女はとても落ち着いてきた。もし今夜死ぬべきだとしたら、それでもいいだろう、彼女は死に抗わないだろう。どうしてなのか？ 彼女は最後の秘密をもう知っ

たではないか。つまり、彼らは人々から角石を作りだし、それを風景に添えるのだ。

そう、七時頃に。

彼女は別れを告げる。時はやってきた。



なに、彼女はいまなお生存中？

暗い。夏は夜の間だけ暗く、朝や夕方は暗くない。だから夜なのだ。どうして他の人たちと一緒に大きな螺旋の中に彼女は横たわっていないのか？ ひよっとしてまた、予期せず唯一の生き残りなのか？ もしアンファンクジーベン運動が始まったのなら、九時頃にはもうおしまいだろう。それで彼らは彼女を元の場所に戻したのだ。

頭の上にある何かがむずむずして我慢できなくて、彼女は掻こうとする。右手も掻こうとするのか？ いや、するつもりはない。右手は掛け布団の上にとらりと横たわっている。だから彼女は左手でやってみなければならない。左手をあらゆる抵抗に逆らって引っ張りあげる。本当に、髪の毛を触れそうだ。でもむずむず

ずするところには、髪の毛がない。髪の毛はどうしたのだろう？　それで彼らは写真を盗んだのか！　へん、それは奪い返すよ、と彼女は誓う。あらゆる力をこめて、自分の指を頭に持っていき始める。近くまで持ってくる。金属製の小さなタンクトラップが頭蓋骨に刺さっている。彼女は、二、三個取り外そうとする。突然液体が流れるのを感じる。味見をする。それは血だ！　タンクトラップを打ち込む権利をあいづらはどこから得たのか？　彼女は叫び始める。ベッドのなかで、彼女が紛れもなく横たわっているそのベッドのなかで、のたうちまわり始める。

誰かが来る。金髪の女？　ほんとうに。ついてないなあ。むつつりと金髪は彼女をのぞき込む。

「なんてこと、やらずにはいられないってこと？　さあ私があなたをまた洗って着替えさせましょうね。罰としてあなたをしっかり固定して、布団はとっておきましよう。まだほかに何をしでかすか、わかったものじゃない！」

彼女は文句を言い続けながら、まわりをきれいにしていく。タンクトラップを付けなおす。血にまみれた

指の爪をきれいにする。作業が終わると、彼女は左腕と左足を白い布でベッドの縁にしっかり結びつける。

そら、彼女はまたもや袋をひとつ鉤にひっかける！



目が覚めると、寒い。とても寒い。ここは冷えている。あの金髪は本当に布団をとってしまったのだ。いま金髪は同じく青い外衣を着た女に報告している。二人はベッドから少し離れて立っている。

「キーリング、イボンヌさん、交通事故による肺断裂」とその金髪が言う。

またもや。彼女はいまだに取り違えられている。金髪は、イボンヌ・キーリングは夜静かに眠っていたと言う。

もちろん、金髪はそんな嘘を吹聴するとき、彼女を一度も見ることはない。

つまり、金髪は彼女については全く話さないというのか？　ゆつくりと、金髪の視線に沿って動いてみる。ベッドの反対側の柵、もう一人の女がいる方に目が届く。その女は意識があるようには見えない。口と鼻、

腕とそけい部には管が通っている。

その人はいったいどこから突然やってきたのか？  
彼女はひよつとして夜に生き残った唯一の人というわけではないのか？

次から次へと疑問。



次から次へと疑問。目が覚めると、頭のなかでカタカタ音がする。なんとなくいまは目覚めている時間が長くなっている。だからもつと長くカタカタ音がしているのかもしれない。

イボンヌ・キーリング！ 一九七二年生まれでヒュッケルホーフエン在住！ いまわかった！ 彼女は大声で笑い、見抜いたことを喜んでいる。彼女はその黒髪の女に言うつもりだ。その人はちょうどイボンヌ・キーリングの身体をストレッチしている。でもその女は意識不明のはず！ いったいいつから意識不明の人の身体を動かせるのか！ ああ、しまった、何も話せない。いったい全体どうして話すことができないのだろう？ 頭のなかでは、言いたいことはあらかじ

め形になっているのだ。でも口からそれがでてこない。彼女は管をつけた左手を口元に持ち上げる。鼻にも。なんだって、イボンヌ・キーリングと同じような管が彼女にもついているのか？ もうたくさんだ。思いつきり彼女は引つ張る。痛くない。引つ張る、引つ張る。黒髪の女が突然叫び声を上げる。彼女のベッドにやってくる。おいしくなかったのかと、黒髪は悲しそうに聞く。

「おいしくなかったのですか？」

でも黒髪もまた、少しだけ微笑んでいる。



ノックの音がする。

「ご主人がいらつしゃっていますよ、ヴェーゼンダールさん」

ヴェーゼンダール……。ご主人が来ている。彼もヴェーゼンダールと言うのだろうか。そう考えるより早く、彼女の夫は洗面所に向かって足を踏み入れる。彼は絆創膏をはがし、右の目から包帯をとる。なに、一体どうしたの。彼女は聞きたかった、本当に。彼は

ベッドまで来ると、泣いている。彼女が子どもを産んだとしてもいいのか。最後に彼が泣いているのを見たのは、一番下の娘が生まれたときだった。それは五年前のことで、彼はまさに今と同じようにベッドの脇に立っていた。彼女は念のため、自分の胸に赤子がいるのかどうか確かめてみる。

いない。

ほらね、まあ念のためってことだったわけよ。

彼は目の病気なのか？ それなら涙がでる説明になるだろう。

彼女はここに来てから、どうしてまだ五歳の娘のことを考えなかったのか。それから——まだもう一人いる！ それからもう一人！ 五歳、十四歳、十八歳、二十歳、二十三歳——そう、本当に、五人も子どもがいる！ 一度に全員思い出すなんて、驚きだ。



三百二十七引く八掛ける十七。引き算はカッコのなか。三百十九掛ける十七になる。三百二十掛ける十七は……五千四百四十。そこから十七を引くと、答えは

五千四百二十三。



彼女の足元から少し離れて、部屋の隅に机が一つある。その上にヨーグルトが二つ。フルーツヨーグルト。メモ書き。そして写真。彼女は身体を伸ばしてみる、興味津々だ。あらこれわたしよ！ それは彼らが盗んでいた彼女の写真ではないか！ 彼女はそれを取り返すと言わなかったか。紛れもなく黒髪で、面長、ふっくらした唇が見える。瞳の色は？ 写真は白黒で、それは見分けられない。瞳は青ではなかったか。自分の瞳の色を思い浮かべようとする。青。晴天だと水色があった色、曇りのときは濃い色がまだらに混じる。自分の写真を取り戻して、彼女はとても嬉しい。

これをどう思う、リシー？

そう聞けたなら、何ですてきなことだろう！

つまりリシーはそこにいるのだ。リシーはナターシャと来ていた。リシーは彼女の十八歳の娘で、ナターシャは夫の娘だ。そうだ、一緒になる前に、夫は一度結婚していたのだ、と彼女は思う。彼女はナターシャ

のこともリシーとほとんど同じくらい好きだ。それとも思い違い？

二人は車椅子を持ってきた。それで彼女を家に連れて帰るつもりだ。絶対に二人は彼女を家に連れて帰るつもりだ。でもどうして車椅子は彼女が目を閉じたときにだけ見えるのだろうか？ 彼女にはわからない。目を再び開けると、車椅子は消えている。ああ、リシーとナターシャまでももう行ってしまった！ 残念だ……。

彼女はもう一度写真のほうへ身体を伸ばすが、写真ももうない。

それは黒い喪章をつけていた、と彼女は思う。



彼女は食事にヨーグルトをもらう。

「胃のゾンデを引き抜いてしまったの？？」  
信じられないと金髪は黒髪に聞いた。

だから彼女に食事を与えなければならぬ。

彼女はいい気味だと思つてにやにやする。

「どうしてそんな風ににやにやしているの？」

なぜにやにやするのか、彼女はわかつている。  
金髪にそれを言いやしないだろうけど！



黒い喪章で縁取られた写真が、長くて白い天幕のなか、最前列の机の上にある。その後ろに椅子が並ぶ。一体どこから彼女は見ているのか。天幕の屋根の下を漂っているようだ。

だんだん列が埋まっていく。一番前に彼女の両親。そこには舅と姑もいる！ あなたたちに会えるなんてすてきだわ。彼女の子どもたち。彼の子どもたち。三人は二人の子どもで、ほかにそれぞれ二人ずついる。ヴィリイおじさんが来る。彼はもう八十歳を超えている。おじさんの妻ウルテ。おばのシュテッテル、従姉妹のタバア、おばのウシュ——ああ、でもウシュおばさんはずっと前に亡くなったはずでは？ 彼女はびっくりする。カールおじさん。カルラおばさん。おばさんの娘のキーラとカーヤ。そこにはマックスがいる。二人目の息子の父親だ。息子の名前をやつと思ひ出した、ビルだ！ ああ、ビリイ、小さなビルちゃん

……。ふたりのリタ、ピエトロ、エルケ、カルメン、イヴォンヌ、インゴ——こんなにたくさんの人がいて、ここはいつぱいになるだろう！　いつたいいここで何を祝っているのか？

好奇心に満ちて彼女は入り口を覗くが、何も起こらない。人々は黙っていて、互いに話さない。まったく。彼らはなんだか悲しそうに見える。

誰かが彼女の足をひっぱる。彼女はまわりを見る。ああ、夫だ。彼は天幕の正面の壁にある小窓から彼女を引きずり出そうとしているが、その必要はない。彼女は自分で天幕からすり抜ける。夫は彼女を抱きしめる。人々は葬式を待っているが、でもそれは大間違いだった、葬式は行われないよ、と彼は言う。

ほら、誰を連れてきたと思う？

彼女は振り返る。喜びでまったく身動きできない。それはスラニヤだ！　去年インドで彼女はスラニヤを知った。スラニヤは五、六歳だろうか、正確な年齢はわからない。なぜなら、首には蛆虫に食われた傷をつけて、路上で発見されたからだ。彼らはスラニヤを養子にするつもりだったのか？　ああ、スラニヤ、あな

たいまここにいるのね……。

彼女はスラニヤを抱きしめたかった、でもスラニヤはきつぱりとした態度をとる。スラニヤは両手を挙げて彼女との距離をとり、一本の指を口元にあてる。

スラニヤがそんなふうに誘導するなんて、どういうこと？　するとスラニヤは彼女の身体を伸ばして床に横たえ、その右足を両手で少し上げてしっかりとつかんでいる。スラニヤは待っている。夫が張りつめた顔をして少し離れたところに座っている。突然、何かが彼女を天幕のなかに引っ張ろうとしているのを感じる。天幕の布にあいた小窓だけが、彼女を自分の葬式から切り離している。彼女は笑う。吸引力は段々強くなるが、スラニヤは静かに座り、彼女の足をつかんでいる。それにしてもなんとという力がこの少女にあるのだろう！　吸引力はこの小さな女の子には全く歯が立たない。本当のところ、どういう結果になろうと彼女にはどうでもいいことなのだが。

一体どのくらいの時間がかかるのだろうか。もう一眠りするべきなのか。



スラニヤはやり遂げたようである。いまだに彼女は生きている人たちのなかにはいないか？

もちろんマテスがスラニヤを家へ連れて帰ったのだ。だから彼らには六番目の子どもがいる。

マテス？ 彼はマテスと言うのだ！

「マッズ」

彼女は両目を開けて黒髪の顔をじっと見る。

「まあ、最初の言葉を言いましたね。さあ次の言葉もでるでしょう」

「マッズ？ マッズ！ マッズ、マッズ、マッズ……」

これがしゃべった言葉なのか？ 声はしわがれていく。テの音は聞こえないし、そのテのあとに続くはずのスの音は濁った有声音のズになっている。



マテスは頻繁にやってくるようになった。

それとも彼は以前からいまと同じように頻繁に来て

いて、ただ彼女がいつも寝ていただけだったのか。何一つ記憶がない。

マテスはやって来るといつも、彼女のベッドに近く前に、右目の眼帯をとる。

どうして自分がここへ来たのか聞きたい。何もかもわからないのだ。でもそんな複雑なことは話せやしない。

彼女が言うのは「へー、マッズ！」か、それとも

「マッズ、こんにちは」だ。

彼は理解している。理解しているのだ！ 彼女の野心がかきたてられる。

「ビストオイレン？（あんたふくろう？）」（注二）と彼女は尋ねる。彼が見る。考え込んでいるのか？

突然叫ぶ。「そうだ、ぼくはオイレン（ふくろう）だよ！ そう、そう！」

「ヤンドル」だったら発音できないだろう、と彼女は思う。「マイレッカー」（注三）も言えないだろう。

運が良かった。「ビストオイレン？」はとても簡単に口からでた。

イヴォンヌ・キーリングはもうそこにいない。彼女はまた一人だ。

また？



お尻拭き係は今日彼女の管を抜いた。膀胱から管を引き抜いた。

手に付いている管は外された。（でもカニユーレは残っている！）

そけい部からいくつかの管が外されたような気がする。

お尻拭き係が息を吹きかけるための装置を渡す。その中には球がいくつか入っていて、息を吹きかけて次に高い場所に移していく。彼女は試してみる。哀れにも失敗に終わる。

さらに、四つのバネがついた小さな板がある。それを手にとって、それぞれの指でひとつずつバネを押しつぶすように言われる。彼女は右手で掴もうとするが、



それはうまくいかない。

「できない」

「どうしてできないのですか？」

「右手はできない」

「左手でとってみてください！」

「どうして？」

彼は質問を理解したのだろうか？ 彼女に答えてくれるだろうか？ どうして右手を動かせないのだろうか？

彼は答えてくれない。その代わり彼は微笑みながら彼女の左手を取り、バネを押し。彼女の指で。

ところでカニユーレって何なの？



医師団がやって来る。

「今日あなたは移されますよ」

移される？ 移されるって、どういう意味なのか？ 廃棄物のように処理するために移して、その後は、そんなことは思い出せないというようなぞろりをするつもりなのだろうか？

彼女は不安に——また不安になる。

こんにちは、不安。

わたしに会いに来てくれてうれしいわ。

不安は親しげな挨拶に耳を傾けない。不安はすぐに肝心な用件に取りかかる。部屋の片隅で大きなハンマーを叩こうとしている。

「二十一病棟に行きます。あなたのベッドを使いますよ」

ほつとする。移すというのは、廃棄処理するためではなくて、単に別の場所に移すだけの意味するのだ。本当は不本意だとしても？



お尻ふき係が車椅子を持ってくる。彼女はそこに座らされ、部屋から出て行く。突然の暖かさに彼女は驚く。外は最高の夏だというのに、どうしてドアの向こう側はそんなに寒いのだろう？

お尻ふき係は、彼女が病棟をもう一度見られるように、二回りしてあちこち動かして、個室までのカーブを走らせる。

お別れ。

彼女は笑顔で視こうとするが、別離の思いが珍しいことに彼女の目から涙を流させる。

「あれあれ、ヴェーゼンダールさん、成功したのを喜んでくださいよ。集中治療室は三週間もいたのだからもう十分ですよ！」

集中治療室？

またカチャカチャする音が頭の中で聞こえてきそう。どうしてここにいたのだろうか、彼女は考えるが、答えは出てこない。

#### 【訳注】

- 一 テーオドーア・シュトルム（一八一七年ー一八八八年）の童話『小さなヘーヴェルマン』（一八四九年）の主人公。
- 二 ビストオイレン？（*Bist Eulen*） オーストリアの前衛詩人エルンスト・ヤンドル（一九二五年ー二〇〇〇年）が制作したCDのタイトル。自作の詩を朗読している。
- 三 ウィーン生まれの詩人フリーデリケ・マイレツカー（一九二四年ー）。ヤンドルのパートナーであり、一緒に執筆した放送劇は高い評価を受けた。

【解説】

本稿で訳出したのは、Kathrin Schmidt: Du stirbst nicht. München: Btb Verlag, 2011 (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 2009) の第一章「瞬く間に」、あるいは (Wimpenschlänge oder in the Twinkling of an Eye) である。この小説は六章に分かれ、全部で三百四十八頁ある。今回訳した第一章は六頁から二十六頁までの二十頁余りで、最も短い。なお、両版に内容の異動はない。

作者カトリン・シュミットは一九五八年、東ドイツ（現ドイツ）のテューリンゲン州、ゴータに生まれる。イエーナ大学で心理学を学び、最初の詩を雑誌『新ドイツ文学 (Neue Deutsche Literatur)』（東ドイツの文学雑誌で、一九五二年から二〇〇四年まで発行）に発表する。卒業後は、大学の助手、臨床児童心理士、編集者などの仕事を転々としながら、執筆活動を続けた。

一九八二年には最初の詩集が『ポエジーアルバム (Poestalbum)』（東ドイツで毎月出版されていた詩集）一七九号として発行される予定だったが、「政治的に不快な箇所」があるとして、一九八八年まで延期されている。一九八九年、ドイツ東西を分断していた壁が

崩壊したときには「ベルリン円卓会議」に参加する。一九九〇年には、女性誌『イプシロン (Ypsilon)』の編集をし、またベルリンの比較社会学研究所で研究員として働く。一九九四年から作家業に専念して、詩のみならず、小説、散文、物語など多岐にわたる文学作品を発表し、これらの業績により数多くの文学賞に輝いている。

詩作から始めたシュミットが初めて小説を上梓したのは一九九八年になってからである。その後、詩、SF小説、散文を書きながら、二〇〇二年に二冊目の小説を書き上げる。だが、同じ年に彼女はくも膜下出血で倒れてしまう。一命は取りとめるものの、右半身の麻痺と言語障害が残る。それでも彼女は一年も経たないうちに少しずつまた書き始め、二〇〇五年には三冊目の小説が出版される。さらに二〇〇七年になってから、シュミットは病院での体験をもとに小説『きみは死なない』を起稿し、二年の歳月をかけて二〇〇九年に上梓する。

以上のように『きみは死なない』はシュミットの体

験がもとになっているため、自伝的小説とみなされることもある。実際に、草稿は一人称で書き始められ、年齢や職業、五人の子どもがいるところなど、作者と主人公ヘレーネの共通点は多い。だが、シュミット自身は「わたしの物語」(注2)であることを否定し、この小説のフィクション性を強調している。

当初の一人称から三人称に形式を変えたのは、自伝的に読まれることを避けたためかもしれない。だが、三人称にしたことにより、主人公の内的独白は「わたし」という主語を使うよりも客観的になり、隔たりが感じられる。たとえば、小説の最初の場面では、眠っているように見える主人公の内面の声が綴られている。

いったい誰が結婚するのか？ 彼女は目を開けようとする。失敗。目を開けようとしているだけなのに。それだけで十分だ。それにしてもはつきりと母の声が聞こえる。ああ、やっぱりカトラリーだ！ 母は何て言っているのか？ (61頁)

「それにしてもはつきりと母の声が聞こえる」と訳したが、ドイツ語では「彼女は」という主語が入る。直訳するなら「それにしてもはつきりと彼女は母の声を聞くことができる」となる。ただ、この場面は語り手による主人公の描写というよりも、主人公の内的独白と読めるだろう。集中治療室で目覚めた主人公の、混沌とした意識からでる声を描いている。日本語訳では主語を省くことで、内的独白を表し、かつドイツ語で読んだときの距離感を表すため、中性的な語調にした。つまり、女らしい言葉遣いで訳すことも可能だが、そうすると主人公との距離がなくなり、媒介のない一人称の独白と同じになってしまう。そうならないように、あくまでも語り手を通して、主人公の心のなかの動きを追うことを試みた。

ちなみに、第一章では二箇所のみ、「彼女」ではなく「わたし」が用いられている。たとえば、主人公の幻覚なのだが、部屋の隅の机に自分の写真を見つけて「あらこれわたしよ！」(49頁)

と声を上げる。主人公が自分の容貌を思い出す場面である。意識がよりはつきりし、外見だけではあるが、

自分が誰であるかを自覚する場面となっている。

第一章は、ヘレーネが集中治療室からである場面です。彼女との関係は始まったばかりで、このあと第二章から第六章まで続くことになる。さまざまな治療を受け、徐々に快復していく過程が、病院でのエピソード、また彼女の記憶による物語とともに描かれていく。

ところで、「きわめて独特な」という限定付きだが、この小説は「発展小説」(注二)と紹介されている。話すことができず、また身体も思うように動かせないヘレーネが、言葉と記憶を取り戻し、再び作家として書き始めるという話の筋は、古典的なドイツ文学によく見られる、若い主人公が幾多の苦難を乗り越え、成長していく姿と重なるのだろう。『きみは死なない』の主人公は、四〇代の大人であり、また「成長」ではなく「回復」という違いはある。それでも、主人公は全て失われた状態から、ひとつひとつできることを獲得していき、また自分の努力だけではなく、周囲の援助とともに変化していく点など、「発展小説」と呼ばれるジャンルとの共通点は多い。確かに、ヘレーネは失

われた機能を再び取り戻すことと同時に、さらに前へと進んでもいる。

なお、『きみは死なない』は二〇〇九年に「ドイツ書籍賞 (Deutscher Buchpreis)」を受賞している。この年の「ドイツ書籍賞」には、同年ノーベル文学賞を受賞したヘルタ・ミューラーも候補に挙がっていた。ヘルタ・ミューラーは前評判がよかったので、シュミットの受賞は意外であり、称賛される一方で批判もあった。

#### 【解説注】

- 一 新聞のインタビューで、この小説を書き始めた経緯をシュミットは語っている。 <https://faz.de/Montagsinterview-Kathrin-Schmidt/15150084/> [最終閲覧日: 二〇一九年八月二〇日]
- 二 二〇〇九年「ドイツ書籍賞」受賞に際して「きわめて独特な発展小説 (ein Entwicklungsroman ganz eigener Art)」と紹介されている。 <https://www.deutscher-buchpreis.de/archiv/jahr/2009/> [最終閲覧日: 二〇一九年八月二〇日]

「発展小説」Entwicklungsroman については次の事典を参照。

Otto F. Best: *Handbuch literarischer Fachbegriffe. Definitionen und Beispiele*. Frankfurt a.M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 1994, S.148.